

●「元勳」とされた元老は9人

大変な存在だった元老

昭和15年11月、「最後の元老」西園寺公望が亡くなり、国葬が行なわれた。大正4年8月に井上馨が静岡県興津の別荘で危篤になった時、「病気に障ってはいけない」と、東海道線を走る全列車が徐行運転、息をひそめるように通った。

▽元老は 憲法や法律で 置かれたものではない

▽明治維新に功績 明治国家の建設者として

天皇の詔勅で「元勳」優遇とされた

	日露戦争	明治維新	西南戦争	日清戦争
	(1904年)	(1868年)	(1877年)	(1894年)
[長州藩]				
伊藤博文	62歳	26歳	35歳	52歳
山県有朋	65歳	29歳	38歳	56歳
井上馨	68歳	32歳	41歳	58歳
桂太郎	56歳	20歳	29歳	46歳
[薩摩藩]				
黒田清隆	—	27歳	36歳	53歳
西郷従道	—	24歳	33歳	51歳
松方正義	68歳	32歳	41歳	59歳
大山巖	61歳	25歳	34歳	51歳
[公家]				
西園寺公望	54歳	18歳	27歳	44歳

▽元老政治は 裏を返せば 薩長の藩閥政治

▽日清・日露戦争を 切り抜けたのは 元老の存在に

●明治憲法は政治機構、ことに戦争指導に大きな弱点

大日本帝国憲法(明治22年2月11日)

- 第1条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス
- 第3条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス
- 第11条 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス
- 第12条 天皇ハ陸海軍ノ編成及常備兵額ヲ定ム
- 第55条 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責メニ任ス

伊藤 博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909)周防の百姓の家に生まれる。公爵。萩の仲間の養子になり、松下村塾に学ぶ。木戸孝允に従い尊皇攘夷運動に参加。文久3年井上馨とイギリスに密航。4国連合艦隊の下関攻撃を聞いて帰国、講和に尽力。維新後は外国事務局判事。明治4年岩倉使節団副使として欧米視察。参議・工部卿を経て大久保利通暗殺後は内務卿となり内閣制度、憲法制定、枢密院設置など国家体制を整備。18年初代首相に就任し、4次の内閣を組織。3度枢密院議長。33年立憲政友会を創設、総裁。38年韓国統監となり、ハルビンで暗殺される

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922)長州藩出身。公爵。陸軍大将・元帥。松下村塾に学び奇兵隊軍監。戊辰戦争で官軍参謀。明治2年欧を視察し陸軍大輔を経て6年陸軍卿。軍制確立、徴兵令制定に当たり11年参謀本部長。内務卿を経て18年内相。22年首相。枢密院議長となり、日清戦争で第1軍司令官。31年第2次内閣を組織、文官任用令を改正し軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争では参謀総長。その後は元老として政界を操縦した

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940)京都生まれ。公爵。九清華家の出で戊辰戦争で山陰道鎮撫総督・北国鎮撫使として転戦。明治4年渡仏しソルボンヌ大に学ぶ。駐墺・独公使。25年第2次伊藤内閣文相。33年枢密院議長。36年政友会総裁となり、39年首相。44年第2次内閣を組織したが陸軍2個師団増設問題で辞職。大正末期から最後の元老として後継首相奏請

▽天皇は 政治責任を 負っていない

▽天皇の行政権は 国務大臣の輔弼で

天皇の行為決定に関し 進言し 責任をとった  
— 総理大臣の権限が極めて弱かった —

「内閣官制」(明治22年12月24日詔)では、「内閣総理大臣ハ、各大臣ノ首班トシテ、機務(機)ヲ奏宣シ、旨ヲ承ケテ行政各部ノ統一ヲ保持ス」

現在の憲法では、首相は「内閣の首長」であり行政各部を指揮監督するが、各大臣の席次第1位ということで、内閣の纏め役に過ぎない。現在は、国務大臣は首相が任命し、任意に罷免できる。戦前は、国務大臣は天皇が任命し、「単独輔弼責任」で、各大臣が国政に関して直接天皇に責任を負っていて、首相は罷免できない。現在の議員内閣制は内閣の連帯責任制を定めており、内閣の決定に反対の大臣は辞職するか、閣内に残る場合は内閣の決定に従うことになる。しかし戦前は、内閣の中で一人でも意見が違えば、「閣内不一致」で総辞職しかなかった。

#### 東条英機内閣の総辞職も…

昭和19年7月サイパン島陥落による戦局悪化で、重臣の間に「もう東条内閣ではダメだ」と、倒閣の動きが出てきた。東条は重臣2人を入閣させ、内閣強化で乗り切ろうとしたが、それには国務大臣ポストを空けなければならない。軍需次官で国務大臣の岸信介に大臣辞任を求めたが、拒否され、総辞職に追い込まれた。

東条は当時、陸相、軍需相に参謀総長を兼務、権力を一手に握っていたが、その東条でさえ、一国務大臣のポストを自由にできなかった。

#### ●歴代首相に立ちはだかる「統帥権の独立」

▽統帥=軍の用兵・作戦計画を立て 指揮すること

▽天皇の統帥権は 統帥部(参謀総長、軍令部総長)の  
輔翼(輔弼と副)によって 行われた

▽参謀総長 軍令部総長は 天皇に直接隷属

首相とは 全く 対等並立の存在だから

政府 議会の制約を受けず 首相も口出し出来ぬ

#### 井上 馨(いのうえ・かおる)

天保6(1835)～大正4(1915) 長州藩出身。侯爵。尊皇攘夷を唱え、文久3年伊藤と渡英。維新後大蔵大輔。明治11年参議兼工部卿。外務卿、18年伊藤内閣外相に就任、条約改正に当たるが失敗。農商務相、内相、蔵相歴任、財界に重きをなす

#### 桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。公爵。陸軍大将。陸軍次官、台湾総督を経て明治31年陸相。34年第1次内閣を組織、日英同盟を締結し日露戦争遂行。41年第2次内閣で韓国併合。42年内大臣兼侍従長。大正1年第3次内閣組織に、護憲運動が高まり、2か月で辞職

#### 黒田 清隆(くろだ・きよたか)

天保11(1840)～明治33(1900) 薩摩藩出身。伯爵。五稜郭攻略で戦功を立て明治3年開拓次官、7年参議兼長官、北海道開拓の基礎を作る。14年「開拓使官有物払下事件」で世論の攻撃を受ける。伊藤内閣農商務相を経て21年第2代首相。条約改正交渉に失敗、辞任。28年枢密院議長

#### 西郷 従道(さいこう・つぐみち)

天保14(1843)～明治35(1902) 薩摩藩出身。侯爵。海軍大将・元帥。隆盛の弟。明治2年山県と渡欧。陸軍大輔、近衛都督。18年伊藤内閣海相兼農商務相。6代の内閣で海相、内相を務め、「薩の海軍」の巨頭として軍・政界に重きをなした

#### 松方 正義(まつかた・まさよし)

天保6(1835)～大正13(1924) 薩摩藩出身。公爵。明治8年大蔵大輔。11年大蔵卿となり、日本銀行条令、兌換銀行条令制定。18年伊藤内閣蔵相。24年首相兼蔵相となるが選挙干渉で辞職。29年第2次内閣で金本位制実施。赤十字社長、内大臣

▽政治が 軍事を支配せず 軍事優先の国家体制に

●天皇の行政権と統帥権とを調整し、纏めて補佐する機構が、日本にはなかった

▽戦争になれば 政略と戦略の 統合・調整

戦争指導が 重要な課題となるが

国家意志の決定は 政府・統帥部の合意で

▽決断の遅れ 妥協による 矛盾・不統一を生んだ

▽憲法の欠陥が もろに出たのが 昭和の日本

#### 首相の嘆き

昭和6年9月、関東軍は柳条湖で満鉄を爆破して満州事変を起こした。若槻礼次郎内閣は「不拡大」の方針だったが、統帥権を盾に軍事作戦を拡大、若槻は「日本の軍隊が、日本の政府の命令に従わないという、奇怪な事態になった」

支那事変の発端となった昭和12年7月の盧溝橋事件も、些細な発砲事件だった。近衛文麿内閣も「現地解決・不拡大」を方針としたが、近衛には軍の作戦計画が分からない。閣議で、ある閣僚に「陸軍は大体どの辺で、軍事行動を止めるのか」と聞かせたが、杉山元陸相は黙ったまま答えない。陸軍は、政党出身閣僚から軍の機密が洩れることを、極度に嫌っていた。見兼ねた米内光政海相が「これこれの線だ」と答えると、杉山は「こんな所でそういうことを言っているのか」と、米内を怒鳴りつけたという。

●同じ憲法で日清・日露戦争は、なぜうまくいったのか

▽元老が 天皇に代わり

政略・戦略の 統合・調整機能を果たした

▽日露戦争の時 5人の元老(樺 嶽 壯 勘 旭)

#### ロシア公使ローゼンの報告

「日本の内政、外交は、元老の同意がなければ何も行なわれない。総理大臣といえども、元老の意思に反しては何も出来ない。そして元老たちは功なり、名を遂げて、年をとっているので、一国の安全を賭して、ロシアに戦いを挑んだりすることは、万に一つもないだろう」

大山 巖(おおくま・いわお)

天保13(1842)～大正5(1916) 薩摩藩出身。公爵。陸軍大将・元帥。隆盛の従弟。明治3年渡欧、軍政・砲術を研究。帰国後陸軍卿を経て18年陸相。以後6代の内閣で陸相を務め日清戦争で第2軍司令官。32年参謀総長となり日露戦争では満州軍総司令官。大正3年内大臣

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸相を経て昭和16年首相となり太平洋戦争を指導。19年2月参謀総長を兼務。7月サイパン島陥落で総辞職。戦後拳銃自決未遂。A級戦犯で刑死

岸 信介(きし・のぶすけ)

明治29(1896)～昭和62(1987)山口県生まれ。佐藤栄作の兄。昭和16年東条内閣商工相。18年11月、軍需省設置で国务大臣軍需次官。公職追放解除後、政界に復帰し32年首相。35年日米安保条約改定、激しい反対闘争で辞職。54年引退後も、保守長老として隠然たる勢力を保った

若槻 礼次郎(わかづき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949)松江藩出身。大蔵次官、大正1年桂内閣蔵相。憲政会総裁となり、大正15年首相に就任。金融恐慌の收拾に失敗し辞職。昭和6年再び首相となるが、満州事変で8か月で内閣は崩壊した。著に「古風庵回顧録」

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。貴族院議長を経て昭和12年首相となるが、支那事変早期收拾に失敗。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結、南部弘印進駐。16年7月第3次内閣組織、松岡洋右外相を更迭し日米打開を図るが10月総辞職。戦犯指名で服毒自殺

## 見事な政治と軍事の調和

元老は「限定戦争」の考えで一致し、素早く行動を起こした。伊藤は、ルーズベルト米大統領に講和の仲介をして貰おうと金子堅太郎を渡米させ、開戦と同時に終戦の布石を打った。井上と松方は、戦費調達の外債募集に、日銀副総裁高橋是清を欧米へ派遣した。

大山は満州軍総司令官として出征する際、薩摩の後輩・山本権兵衛海相に、戦争をいつ終わらせるか、軍配の揚げ時を誤らぬよう頼んだ。山県参謀総長は、奉天の戦い勝利の後、政略と戦略の一致を訴え、日本が有利なうちに戦争を終わらせるよう、外交交渉をせかした。

●伊藤、山県が、日本の表舞台に出てくるのは…

▽維新と共に 家柄・家格の時代は 終わり

才能さえあれば 活躍の場を与えられる時代に

▽西南戦争前後に「維新の三傑」

西郷隆盛 木戸孝允 大久保利通が 亡くなる

### 幕末の長州藩

嘉永6年(1853)ペリーの黒船来航に慌てた幕府は、翌年3月再び江戸湾に来たペリーと日米和親条約を結び、開国へ第一歩を踏み出した。孝明天皇(1831~66)は攘夷論者。幕府が勅許なしに条約を結んだことが、尊皇論を刺激し、尊皇攘夷論となって燃え盛った。

長州藩には、関ヶ原の戦い(1600年)で敗れ、長門・周防36万9千石に押し込められたという幕府に対する積年の恨みがある。幕府、各藩が苦しんだ財政の建て直しにもいち早く成功していた。下関は西回り航路、北国と西国の物資を交流する北前船の寄港地として栄えていた。

豊かになった藩の財政は、異国船に対する危機感と共に、下関に砲台を築かせ、藩内の攘夷論を盛んにした。そこへ「安政の大獄」(1863年)で吉田松陰が処刑され、松蔭門下生を一気に尊皇攘夷へ走らせることになった。伊藤、山県は末席とはいえ、門下生に名前を列ねていた。

## 杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)~昭和20(1945)福岡生まれ。陸軍大将・元帥。昭和12年陸相。15年参謀総長となり19年陸相再任。20年第1総軍司令官。敗戦翌月、ピストル自決

## 米内 光政(よねい・みつまさ)

明治13(1880)~昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和12年海相となり15年首相。三国同盟に反対、陸軍の協力が得られず辞職。19年小磯・鈴木内閣海相

## ローゼン(Roman Rosen)

1847~1922 ロシアの外交官。明治30年駐日公使となり、36年再び公使。38年駐米大使。ロシア革命でアメリカに亡命

## 金子 堅太郎(かねこ・けんたろう)

嘉永6(1853)~昭和17(1942)福岡藩出身。伯爵。藩留学生としてハーバード大に学ぶ。憲法起草に参加、農商務・法相。日露開戦で渡米、講和外交に貢献した

## 高橋 是清(たかはし・これきよ)

安政1(1854)~昭和11(1936)江戸生まれ。子爵。仙台藩留学生として渡米し苦学。日露戦争で外債募集に成功。日銀総裁、蔵相、首相を歴任。6度目の蔵相在任中、二・二六事件で暗殺される

## 山本 権兵衛(やまもと・ごんべえ)

嘉永5(1852)~昭和8(1933)薩摩藩出身。伯爵。海軍大将。海軍改革を推進、明治31年海相となり、六・六艦隊を日露戦争に間に合せた。大正2年、12年首相

## 西郷 隆盛(さいごう・たかもり)

文政10(1827)~明治10(1877)薩摩藩出身。通称吉之助。参議、陸軍大将。倒幕運動を推進し、薩長同盟に尽力。征韓論を唱え下野。西南戦争で城山で自刃

## ●伊藤には、3つの幸運

▽父十蔵と共に 蔵元付仲間・伊藤武兵衛の養子に  
貧農の俸が 曲がりなりにも 長州藩士の資格

▽反対が出た時 武兵衛は言った

「十蔵は大した奴じゃないが、

あの息子は、将来きっと大物になる」

▽来原良蔵の若党になり

来原に勧められ 松下村塾に入ったこと

▽来原死後は 木戸に引き取られ

木戸に従い 江戸・京都を往来 勤王の志士に

▽高杉晋作 久坂玄瑞の「御楯組」に参加

イギリス公使館(副館)を 焼き打ち

同志(13人)に 井上がいて そのお陰で 英国留学

### 伊藤と井上の仲

井上は、220石の上士・志道(しじ)家に養子に入り、その頃は聞多と言っていた。普通なら口もきけない身分の伊藤が6歳も年上の井上を「聞多」と呼び捨てにしても、全く気にならなかった。この鷹揚さが、生死を共にするうちに生涯の友にしていった。

## ●伊藤の人生を決定づけた英国留学

### 「世界をよく見て」は、22歳のロンドンで

長州藩は攘夷の方針を採りながらも、外国知識吸収の必要性は認めていた。井上ら4人が英国で蒸気船の航海術を学んでくることになったが、藩命とはいえ鎖国の時代だから密航。井上は養子先に迷惑をかてはと井上姓に戻ったが、伊藤が「俺も一緒に連れて行ってくれ」

藩政担当の周布政之助は承諾したが、藩主から出た金は6百両。1人年間千両、5人で5千両必要だった。井上ががっかりしていると、伊藤がチエを授けた。「麻布の藩邸には鉄砲買い入れの金として1万両ある。しかし幕府の目が厳しいから買うことは出来ない。その1万両を流用したらどうか。我々を外国へ送るのは、将来生きた武器とするためではないか。武器を買うより、よほどいい」周布は「俺は見ないふりをするから、持って行け」

## 大久保 利通(おおくぼ・としみち)

天保1(1830)～明治11(1878) 薩摩藩出身。参議、内務卿。西郷と倒幕を推進。版籍奉還、廃藩置県を断行。内治優先を唱え、征韓論に反対。紀尾伊坂で暗殺

## 木戸 孝允(きど・たかよし)

天保4(1833)～明治10(1877) 長州藩出身。通称桂小五郎。参議。西郷と薩長同盟を結び倒幕を指導。版籍奉還、廃藩置県を推進、征韓論、台湾出兵に反対した

## 吉田 松蔭(よしだ・しょういん)

天保1(1830)～安政6(1859) 長州藩士。通称寅次郎。ペリー再来の時、密航を企て捕まり、萩に送られ幽閉される。安政4年松下村塾を開き、多くの維新の指導者を育てる。安政の大獄で江戸で刑死

## 来原 良蔵(くるはら・りょうぞう)

文政12(1829)～文久2(1862) 長州藩士。藩校明倫館に学び、松蔭、木戸と親しく妻は木戸の妹。長崎で西洋銃陣を学び、兵制近代化に貢献。藩論が公武合体から尊皇攘夷に一変すると藩論誤解の責任を感じ、横浜の異人館襲撃を計画したが果たさず、江戸藩邸で自刃した

## 高杉 晋作(たかぎ・しんさく)

天保10(1839)～慶応3(1867) 長州藩士。松下村塾に学ぶ。文久2年上海へ渡航し危機感を抱いて帰国。英公使館を焼き打ち、尊皇攘夷運動の先頭に立つ。奇兵隊を創設、外国勢と戦うが、藩内の政変で脱藩、入獄。元治1年許されて4国連合艦隊との講和に当たる。第1次長州征伐の後、恭順派が藩権力を握ったため、福岡に亡命。慶応1年下関へ戻り功山寺挙兵により、藩論を倒幕に引っ繰り返す。翌年、第2次長州征伐で小倉戦を指揮し勝利に導くが、結核で病死

5人は長州出入りの貿易商の世話で英国船に忍び込ませて貰い、文久3年5月12日、横浜から上海へ。そこで船を乗り換えることにしたが、井上が港にひしめく欧米の船を見て悲鳴を挙げた。「こんなに船がいる。日本に向かってこられたら、ひとたまりもない。攘夷なんてとんでもない」伊藤は「そう結論を急ぐことは…」となだめたが、誰しも思いは同じだった。

4か月がかりで着いたロンドンは、他国に先駆けて産業革命を成し遂げ、世界一の発展、繁栄を誇っていた。伊藤も造船所、工場、軍隊、議会と見て回るうち、バリバの攘夷論者が、コロリと変わっていた。

●長州藩を攘夷から倒幕へ、路線転換させた下関戦争  
▽朝廷から 厳しく 攘夷を迫られた幕府は

文久3年5月10日を「攘夷決行の日」とした

▽長州藩は 飛び付いた 米商船を皮切りに

関門海峡を通る外国船を 片っ端から砲撃

▽下関が報復攻撃され 下関戦争が始まった

▽敗勢建て直して 高杉晋作が 起用された

▽高杉は 泰平の世に慣れ切って

無力化した家臣団(正兵)に 見切りをつけ

身分より 力量・志を重んじる「奇兵」を編成した

高杉が藩へ出した建白書

奇兵隊の義は、有志の者相集候に付、陪臣・雑卒・藩士を選ばず、同様に相交り、専ら力量をば尊び、堅固の隊相調申すべくと存じ奉り候

▽奇兵隊は 6月6日

下関の豪商 白石正一郎の家で 編成され

3日後には 隊員は 白石など60名を超えた

▽伝統的な 幕藩体制の枠を 突き破った

民兵組織は11作られ「諸隊」と呼ばれた

▽高杉の狙い通り 倒幕戦争の 中心勢力に

●伊藤、井上は、留学を半年で打ち切り帰国へ

▽翌年3月(元禄1年) ロンドン・タイムズを見て愕然

四国(英仏蘭)連合艦隊17隻が 下関攻撃を準備

久坂 玄瑞(くさか・げんずい)

天保11(1840)～元治1(1864)長州藩士。松下村塾に学び、高杉と村塾の双璧。妻は松蔭の妹。松蔭刑死後、尊皇攘夷運動の先頭に立ち、英公使館を焼き打ち。藩兵を率いて上洛、蛤御門の変を起こし、負傷して自刃した

周布 政之助(すふ・まさのすけ)

文政6(1823)～元治1(1864)長州藩士。藩主側近の政務役に抜擢され藩政改革を推進。松蔭、高杉ら急進派にも理解を示し、俗論派との対立で謹慎・藩政復帰を繰り返すが、蛤御門の変、下関戦争で藩内動揺の中、国難打開の方策なく、山口で自刃した

…… 高杉は攘夷の無謀を知っていた ……

文久2年4月、高杉は藩命で幕府の海外派遣団に加したが、攘夷の中心人物が幕府の船で上海へ行くというので同志の反発は強かった。高杉が渡航直前、叔父に率直な心情を打ち明けた手紙が見つかり、日本書籍商協会から公表(年報20年3月)されて話題になった。その中で「風評がかなり多いが外国の形勢は私であればこそ探索できる」と、自信のほどを見せている。

高杉が上海で見たものは、西欧列強による半植民地化の危機に直面した中国の姿だった。日記(上巻)に「中国人がことごとく外国人に顎で使われ、ここ上海の地は、中国でありながら、しかもイギリスやフランスのあたかも属地であるかのようだ」「これは単に中国のことではなく、我々も心すべきことだ」

伊藤は高杉の行動力を「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し」と評しているが、長崎に帰り着くと、独断でオランダ汽船の購入を約束した。

「御楯組」を結成し、英国公使館に焼き

### 戦争回避に努力したが…

「そんなことになったら、藩は全滅する。そうならないよう努力しよう」3人を残し3か月がかりで横浜へ着くと、英公使館に駆け込んだ。「何としても藩論を変えさせるから、攻撃を延ばしてほしい」オールコック公使も承知し、2人を長州沖の小島まで英船で運んでくれた。藩内は攘夷、攘夷で沸き立っていた。「とても戦争をする相手でない」と説得しても、聞き入れない。8月5日、時間切れで砲撃は始まった。

### ●幕府は7月25日、「長州征伐」を号令

▽長州藩は 蛤御門で戦って 敗れていた

#### 「蛤御門の変」(蛤の戦い)

攘夷決行以来、京都で主導権を握っていた長州藩は、文久3年8月18日、突然御所の警備を解かれ京都を追われた。「八・一八の政変」と呼ばれるもので、薩摩・会津藩などの公武合体派の巻き返しだった。

久坂ら尊皇攘夷派は、京都での立場を回復しようと、藩兵、諸隊など2千人で上京、元治1年7月19日、蛤御門で会津・薩摩と戦って敗れた。藩兵の撃った弾丸が御所内に飛び込んだことから、朝廷に弓を引く者として、長州は朝敵となり、幕府は長州征伐の勅命を手に入れた。

薩摩藩は、この頃は中央での主導権を握ろうと、京都や江戸で盛んに働きかけ、長州とは敵対関係にあった。幕府を見切り、長州と結んで倒幕を決意するのは、慶応2年1月のことだ。

▽同時に 二つの戦争は 戦えない

▽高杉は 伊藤 井上の進言で

「宍戸刑馬」という俄家老になり 停戦交渉

▽賠償金300万ドルも「我々は朝廷と幕府の命令に従ったまでだ。取るなら幕府から取ってほしい」

幕府に押し付けて 決着させた

▽イギリスが 法外な要求を出したのは

兵庫開港を迫る 狙いだったが

幕府は 朝廷を憚り 開港より賠償金を選んだ

打ちをかけたのも、安易な開国論に、警告しておきたかったのだ。伊藤は「高杉の真意は倒幕にあったが、いきなり、倒幕と言っても藩論が割れてしまう。そこで藩論を引っ張るため、纏まりやすい攘夷を旗印にしたのだ」

### 白石 正一郎(しらし・しょうちろう)

文化8(1811)～明治13(1880) 下関の廻船問屋。薩摩との交易に尽力。早くから勤王の志を抱き、奇兵隊結成は白石家で行なわれ、弟と入隊。私財を投じて協力し、全国の志士も白石家をアジトとして利用した。維新後、家業は倒産したが、新政府には出仕しなかった

### オールコック (Rutherford Alcock)

1809～1897 イギリスの外交官。安政5年日本総領事兼外交代表に任命され翌年江戸に着いた。万延1年公使となり駐日外交団の指導的立場に。一旦帰国、元治1年再来日し、下関攻撃を主導したが本国政府の承認を得ていなかったため12月、本国に召喚。のち清国公使

### アーネスト・サトウ (Ernest Satow)

1843～1929 文久2年来日し英国横浜領事館通訳となり、オールコック、パークス公使の下で英国の対日政策を反幕派支持転換に貢献。明治28年日本公使、33年清国公使。前後27年間、日本に滞在し著に「一外交官の見た明治維新」

#### サトウの見た長州藩

「一外交官の見た明治維新」に、談判にやって来た高杉を「家老は、黄色の地に大きな淡青色の紋章のついた大紋と称する礼服をきて…白絹の下着は、目がさめるように純白だった」  
また「長州人のだれもが、みんな忠実に協定を守った。この点から見て、

▽100万ドル 払ったところで 幕府が倒れ  
残りは明治7年 新政府が やっと払い終わった

●下関戦争の敗戦は、兵器の大切さを教えた

▽長州藩は 武器商人グラバーから  
新式の洋式銃 2万4千挺を買い入れ  
あっという間に 日本一近代的な 軍事集団に  
▽リーダーは 攘夷の無謀さを知り 幕府打倒へ

●山県の運命を変えた京都視察

「棒っ切れ」が生き残って明治日本を作る

狂介と言っていた山県も仲間の出。槍術師範になるのが夢だったが、安政5年藩から選ばれて京都へ視察へ行った。同行6人のうち、4人までが松蔭門下生で勧められて松下村塾に入った。ある時、吉田稔麿が紙に悪戯書きをした。

鼻輪を通していない威勢のいい放れ牛、烏帽子をかぶった袴姿の人物、次に木剣、離れて棒っ切れが書いてある。山県が「一体何です」吉田は笑いながら「放れ牛は高杉よ。尋常一様では乗りこなせない人物だ。袴姿は久坂だ。廟堂に座らせれば、堂々たる貫禄の政治家さ。入江久一も素質はあるが、まだ一人前ではない。名刀とまではいかないが木剣くらいには当たろう」「最後の棒っ切れは」と聞くと、「それはお前だ。員数だけには入るが、他にこれとって言うべきところがない」

高杉は結核で、久坂と入江は蛤御門の戦いで負傷して自刃、吉田も京都・池田屋で新撰組に斬られ、維新の夜明けを見ないで死んだ。

▽若い頃の伊藤の評価も 似たようなもの

松蔭が熊本の同志に書いた伊藤の紹介状

「才劣り学穉(おた)シ 質ハ直ナルモ  
華(は)ナシ 僕頗(おほ)ルコレヲ愛ス」

●長州藩は、一種の「内閣制」をとっていた

▽殿様は 対外的には 藩を代表する元首  
内政の実権は 家老以下の家臣団に 任された

彼ら長州人は信用に値すべき人間だと云ってもよからう」「長州人を破ってからは、われわれは長州人を好きになっていたのだ。また、長州人を尊敬する念も起こってきていたが、大君(禪)の家臣たちは弱い上に、行為に裏表があるので、われわれの心に嫌悪の情が起き始めていたのだ」

グラバー(Thomas Glover)

1838~1911 イギリスの貿易商人。万延1年来日、長崎にグラバー商会を設立し幕府・諸藩に武器、軍需品を売り巨利を得た。伊藤、井上らの英国留学を援助し維新の舞台裏で活躍。長崎の邸宅は、日本初の洋風建築ととして観光名所に

吉田 稔麿(おだ・としまろ)

天保12(1841)~元治1(1864)長州藩士。松蔭門下で高杉、久坂、入江と四天王と言われた。京都・池田屋で諸藩同志と談合中、新撰組に襲われ重傷を負い自刃

入江 久一(いりえ・くいち)

天保9(1838)~元治1(1864)長州藩士。松蔭に傾倒し獄にある松蔭を助けようと奔走、投獄される。高杉と奇兵隊創設に尽力。蛤御門の変で参謀として戦ったが、負傷して切腹した

伊藤の回想談(新渡部稲造「偉人群像」)

「世の中では、我輩が吉田松蔭の塾に永くあって、その弟子のように言う者もおるが、それは事実上まちがいであって、松蔭の世話にはあまりならない。したがって、先生の教えも受けず、実際、当人に会ったことも、そうたびたびではない」



- ▽藩主は 失敗があっても 責任を取らない  
攘夷・討幕は 家臣の決定に 藩主は従っただけ  
政策の立案 実行者の 責任だった
- ▽下関戦争の敗戦は 急進的な 攘夷派の失敗  
幕府恭順派「俗論党」が復活 凄まじい弾圧  
急進派20人を処刑し  
家老3人に切腹させ 幕府に降伏した

●藩論を倒幕に引っ繰り返した高杉挙兵

- ▽高杉は いち早く 福岡に逃げていたが  
奇兵隊など諸隊に 解散命令が出たと聞いて  
武力蜂起しようと 下関に帰ってきた
- ▽高杉の頼みは 初代総督を務めた 奇兵隊だが  
No.2の 軍監山県が 動かない  
総督赤根武人が 藩政府と 交渉中だった
- ▽伊藤は「私の力士隊でよかったら使って下さい」  
力士隊は 村相撲出身者 30人足らずの隊
- ▽高杉は 伊藤の呼び掛けで 80人ほど  
集まったところで 出陣した(元禄11年12月15日)
- ▽藩政府が 奇兵隊解散の姿勢を 見せたため  
山県も 200人率いて 高杉側に参加した

— 伊藤と山県の性格の違い —

細心さと放胆さ、この両極端を備えたのが伊藤だった。伊藤自身「父は放胆な男で、構うことないから、思い切ったことをやれと、いつも自分に言っていた。その一方、母は極端なほど気の小さい心配性だった。この二つが、自分の中に共存しているようだ」と言っている。

山県は、あだ名が「味噌徳利」—何をやるにも簡単には腰をあげず、慎重かつ神経質だった。仲間が、フグを肴に氣勢を挙げて、山県は毒を恐れてか、ただ一人、別の肴で酒を飲んだ。

- ▽伊藤は 中堅幹部の地位を 占めた
- ▽赤根の末路は悲惨 裏切り者として 晒し首に
- ▽山県は 奇兵隊を握り 戊辰戦争で官軍参謀  
維新後は 欧州を視察 兵部大輔 陸軍大輔
- ▽明治6年 徴兵令を制定し 初代陸軍卿に就任

●元老は、多かれ少なかれ、財界と結びついていた

新渡部 稲造(にとべ・いさう)

文久2(1862)～昭和8(1933)盛岡南部藩出身。札幌農学校に学び、明治24年同校教授。京大教授を経て39年一高校長。大正7年東京女子大総長。9年国際連盟事務局次長。著に「武士道」

「そうせい侯」

長州藩主毛利敬親は、家臣の進言にいつも「そうせい」と許可を与えたので、「そうせい侯」と言われた。イギリス流の「君臨すれども統治せず」で、伊藤が「大臣輔弼」の明治憲法を作った時、この殿様が頭にあったのでは。

毛利 敬親(もうり・たかちか)

文政2(1819)～明治4(1871) 天保4年第12代長州藩主となり、藩政改革に着手。有備館を設立し、明倫館を充実させ、文武を奨励した。下関戦争で攘夷を決行、蛤御門の変で官位を剥脱。慶応3年討幕密勅を受け官位を回復。明治2年木戸の進言により率先して版籍を奉還した

赤根 武人(あかね・たけと)

天保9(1838)～慶応2(1866) 長州藩士。松蔭門下生。尊皇攘夷を唱え、高杉の後を受け奇兵隊総督。高杉挙兵の際、奇兵隊温存のため消極策をとった。藩論が倒幕に一変すると、捕えられて斬罪

..... 山県は別荘を9つも .....

1万8千坪の椿山荘(田)は、藤田伝三郎から、古稀庵(小瀬)も益田孝から贈られたものだった。陸軍卿時代、御用商人山城屋和助に公金65万円を貸し付け、一部は山県の懐に入ったといわれるが、山城屋自決でうやむやに。

..... 井上には尾去沢鉦山事件 .....

..... 秋田県鹿角市の南部藩直営・日本有 .....

▽長州の元老で 首相になんていない 井上は  
「お金で総理になれなかった」と 言われた

#### 井上の仕事には多くの評価

大隈重信「理屈の下手な男だったが、それでいて仕事は成功させた。井上に敬服すべきは、まずその熱心さだ。その勇氣、その胆力だ」

山路愛山「日本政府の前途に横たわる山ほどの難問を解決し、兎角の評はあっても、眼口の開くようにしたのは、井上の精勤と果敢と勇氣ならでは出来ないことだ」

#### 戦前の教科書「母の愛」

井上は下関戦争の後、俗論党の刺客11人に滅多切りにされ、瀕死の重傷を負った。兄五郎三郎に、手真似で「介錯してくれ」と頼み、兄が刀を抜こうとすると、母房子が「どうしても斬るといふなら、私も一緒に斬りなさい」

外科の心得のある所郁太郎が、畳針で50針も縫い、井上は一命を取り留めた。

#### 「財界総理」井上 (池田成彬「敬人今人」)

「当時財界で井上の傘下に入っていないのは三菱ぐらいのもので、大阪の住友、鴻池、九州で貝島、東京で三井、当時の総理大臣はこの井上さん。日銀、正金、その他の特殊銀行はほとんど全部が井上さんの支配。それだから、高橋是清でもあんな大きな顔をしていたが、井上さんの前に出ると他の人と同じく、ぺこぺこそしないが、そばにすわってただにこにこしているばかりで、一言も言わないのです。渋沢栄一さんでさえ、もみ手をして、御前とでも言いかねない格好をしてかしこまっている」

▽山路は「天性才を愛し、

惚れ込んで、よく人を用いた」

▽明治15年 大東日報記者の原敬を

外務省御用掛に スカウトしたのも井上

▽何よりも 伊藤の政治的才能に

惚れ込み その右腕に なるうとしたのでは

▽伊藤の嗣子・博邦は 五郎三郎の四男を養子に

数の銅山(昭和53年剽)。明治5年、藩の財政危機を救った御用商人に払い下げたところ、井上は書類に難癖をつけ、政府所有として長州出身の大阪商人に払い下げてしまった。後に問題となったが、井上は罰金30円で済んだ。

#### 藤田 伝三郎 (ふじた・でんざぶろう)

天保12(1841)～明治45(1912)萩の醸造家に生まれる。奇兵隊に参加、国事に奔走。維新後は長州系高官の縁故を利用、西南戦争の軍事輸送で巨利を博した。明治14年藤田組を組織、鉱山業、児島湾干拓など、大阪財界の指導的地位に

#### 益田 孝 (ますだ・たかし)

嘉永1(1848)～昭和13(1938) 佐渡生まれ、幕臣の子。文久3年、幕府使節に随行して渡仏。明治9年三井物産社長に就任し、三井財閥の基礎を固める

#### 山城屋 和助 (やましろ・わすけ)

天保7(1836)～明治5(1872)周防生まれで本名野村三千三(みちみ)。浄土宗僧侶となったが、奇兵隊に参加。戊辰戦争で山県に従い北越に転戦。維新後、横浜で諸省の御用商人となり生糸で巨利を博したが、生糸相場の暴落で大損害。陸軍からの借金を返済できず、陸軍省で自決

#### 大隈 重信 (おおくま・しげのぶ)

天保9(1838)～大正11(1922) 佐賀・鍋島藩出身。侯爵。明治3年参議、6年大蔵卿。「14年の政変」で免官。翌年、立憲改進黨総理となり東京専門学校(現駒大)創立。21年伊藤内閣外相。黒田内閣に留任、条約改正交渉したが、22年爆弾を投げられ、右足を切断、辞職。31年板垣退助と共に憲政党を結成、史上初の政党内閣組織。大正3年再び首相となり対独宣戦布告

- 伊藤を明治の政界に飛躍させた「周旋の才」
  - ▽松蔭は「俊輔(伊藤の若い頃の名)、周旋ノ才アリ」
  - ▽明治4年 岩倉使節団の案内役として 欧米へ
  - 新政府の実力者 岩倉具視 大久保利通の信任
  - ▽帰国後に参議 大久保暗殺(贈11年)後は
  - 内務卿となり 国内統治の 実質上の責任者に

- 「玉を握る」
  - ▽維新の志士が 天皇を指して 好んで使った
  - 「玉」を抱いたものが官軍 奪われたら賊軍に

「王政復古」の号令

慶応3年12月9日夜、15歳で即位した明治天皇も出席して小御所(京都御所の親・会議所)会議が開かれた。土佐藩主山内容堂は、自ら建白して大政奉還させた徳川慶喜(15代将軍)を擁護し、公家たちの動きを牽制しようと、「幼冲の天子を擁して権力を私しようとするもの…」

即座に岩倉が遮った。「御前でござるぞ、お慎みなされ。今日の挙は全て宸断より出でた事。幼い天子を擁してとは無礼にも程があるう」

容堂も失言を詫び、「王政復古」の号令が下って、「玉」を握った薩長が、賊軍となった幕府打倒を成し遂げた。

▽天皇をシンボルに  
統一国家を作ることが 国家目標に

- 伊藤・山県で際立った天皇・政党に対する考えの違い
  - ▽伊藤は 天皇を「国家の機構」の中で考え
  - 山県は「機構を超えた権威」として 考えた
  - ▽伊藤は 天皇に 持ち前の明るさで 憚ることなく

明治天皇の伊藤評(佐々木精衛の目から)

「伊藤は才力に任せてずいぶん我儘なり。他に伊藤ぐらいの人物あらば、互いに相制して都合宜しきも、その人なし。欧州にてはビスマルク、支那にては李鴻章、日本にては自分と、いよいよ大天狗となりたり」

▽それでも 天皇は 大天狗を 誰よりも信頼  
難問には 必ず「伊藤に確かめたか」

山路 愛山(やまじ・あいざん)

元治1(1864)～大正6(1917) 江戸生まれ。本名弥吉。国民新聞などに評論や史論を執筆。明治32年信濃毎日主筆。著に「荻生徂来」「足利尊氏」「現代金権史」

所 郁太郎(ところ・いくたろう)

天保9(1838)～慶応1(1865) 美濃生まれ。蘭方医。京都の長州藩邸そばに開業して同藩士と交流。下関戦争、蛤御門の変に参加。医官として長州藩に仕える

池田 成彬(いけだ・しげあき)

慶応3(1867)～昭和25(1950) 米沢生まれ。三井銀行常務を経て、昭和12年日銀総裁。13年近衛内閣蔵相兼商工相

渋沢 栄一(しぶさわ・えいいち)

天保11(1840)～昭和6(1931) 埼玉県の豪農の出。一橋家に仕え慶応3年パリ万博に渡欧。第1国立銀行、王子製紙、東京瓦斯を設立。商工会会議所、東京手形交換所などを組織、「財界の大御所」に

原 敬(はら・たかし)

安政3(1856)～大正10(1921) 盛岡南部藩出身。郵便報知・大東日報記者を経て外務省に入り次官。通信相、内相を歴任し、大正2年政友会総裁となり7年首相。初の政党内閣を組織。東京駅で暗殺

岩倉 具視(いわくら・ともみ)

文政8(1825)～明治16(1883) 京都生まれ。公家。公武合体を唱えて尊攘派に弾劾され洛北岩倉村に蟄居。この間、大久保利通らと接触、討幕の陰の指導者に。明治4年廃藩置県を断行して右大臣。使節団を率いて欧米に渡り、条約改正交渉をしたが失敗。帰国後、征韓論を斥け内治優先の政策で天皇制確立に努めた

▽山県は 天皇に 恐懼する態度を 取り続けた

#### 明治天皇崩御の2週間前

天皇は1時間足らずの枢密院会議で再三うとうと眠り込まれた。議長の山県はその都度、軍刀の先でコツコツ床を叩き、天皇に注意した。天皇には、すでに尿毒症の症状が出ていたのだが、山県には、いつもとは違う天皇の異常より、乱れた天皇の姿勢が問題だった。

▽徹底的に 天皇の権威を高め

その権威で 軍を統制し 勢力拡大を図った

●伊藤は明治18年、内閣制度を創設し44歳で首相

▽明治14年 詔勅で「23年の国会開設」を約束  
議会に対応できる 政府の組織づくりが 課題に

#### 太政官制度

慶応4年4月に設置された新政府の最高官庁。明治2年7月設置された民部・大蔵・兵部・刑部・宮内・外務の6省を管轄した。4年7月「太政官職制」で、正院・左院・右院の3院から成り、正院には三職(太政大臣・左右大臣・参議)を置くことが定められた。

しかし、国務について責任を負っているのは太政大臣(三条実美)、左大臣(有栖川宮熾仁親王)、右大臣(岩倉具視)の3大臣で、行政の実権は参議が握っているのに、これでは権限・責任がはっきりしない問題点があった。

●岩倉は、伊藤に「後事」を託した

▽伊藤が 憲法調査に ドイツへ出張(明治15年3月)

病身を押して 横浜港まで 見送りに出た

▽岩倉が 伊藤に くれぐれも 頼んだのは

議会に左右されない 強い君主権の確立

▽伊藤も「議員内閣制は日本には向かない」

日本の憲法は イギリスに学ばず

君主権の強いドイツを 手本にした

●帰国した伊藤の構想は、内閣制度施行

▽大臣は 各省長官を務め 権限・責任をはっきり

山内 豊信(やまうち・とよしげ)

文政10(1827)～明治5(1872)土佐藩主。号を容堂(ようどう)。嘉永1年藩主となり藩政改革を実施。公武合体運動で尽力、慶応3年將軍徳川慶喜に大政奉還を建白、実現させた。小御所会議で、慶喜の朝議参与を主張したが失敗に終わる

徳川 慶喜(とくがわ・よしのぶ)

天保8(1837)～大正2(1913)15代將軍。水戸藩主斉昭の7男。一橋家を継ぎ慶応2年12月將軍に。江戸城開城後、水戸、静岡で謹慎生活を送る。明治35年公爵に

佐々木 高行(ささき・たかゆき)

天保1(1830)～明治43(1910)土佐藩出身。尊攘派志士として活躍し明治3年参議、14年参議兼工部卿。21年宮内省御用掛。著に「保古飛呂比佐々木高行日記」

ビスマルク(Otto Bismarck)

1815～1898 プロイセン首相(1862年)となり普墺戦争・普仏戦争に勝利、1871年ドイツ統一を達成。同盟外交を展開し、「鉄血宰相」と言われた

李鴻章(り・こうしょう)

1823～1901 太平天国の乱鎮圧し、直隸総督・北洋大臣。清朝25年間の外交の実権を握り、日清講和条約締結、義和団事件など、清末の難問処理に当たる

三条 実美(さんじょう・さねとみ)

天保8(1837)～明治24(1891)京都生まれ。尊攘派公家の中心となり、8・18政変で長州へ逃れる。明治4年太政大臣。17年華族令制定で公爵。18年内大臣。22年黒田内閣が総辞職すると後継内閣成立まで、内大臣のまま一時首相を兼任

▽問題は 三条太政大臣の処遇

内大臣(神で天皇を助ける)を新設 総理より上席に  
政府から 宮中を 切り離れた

御前の首相選考会議では

長州閥参議の話し合いで、山県が伊藤を推挙する手筈になっていたが、山県が発言しない。井上がしびれを切らし、「これからの総理大臣は赤電報(烟囪)を読めるものでなくてはダメじゃ」山県もやっと「それならば、誰彼と詮議するまでもなく、伊藤より他に適任者はいないではないか」

反対する者もなく、天皇も承認された。

### ●伊藤の次の仕事は憲法

▽明治19年秋 井上毅 伊東巳代治 金子堅太郎と  
草案起草にとりかかった時 伊藤は言った

「我輩を総理大臣と思うな。全員が憲法学者を以て自ら任じ、同等の見識を以て議論を闘わせよう。少しも我輩の説に遠慮するに及ばぬ」

▽21年4月 伊藤は 新設の枢密院議長に  
薩摩の黒田清隆が 第2代首相

▽伊藤は 天皇の詔勅で 無任所の国務相に  
「朕卿ノ情願ヲ容レ重任ヲ解キ  
特ニ命ジテ内閣ニ列セシム」

枢密院(贈21年4月30日設置)

重要な国務及び皇室の大事に関し、天皇の諮問に応える最高の合議機関。議長・副議長・顧問官で組織し、国務大臣、成年以上の親王も参加できた。昭和22年廃止。

### ●枢密院の憲法草案審議で、伊藤の考えが分かる

▽まず「天皇ハ帝国議会ノ承認ヲ経テ

立法権ヲ施行ス」(第5条)が 問題になった

「承認は、下から上に対し認可を求めることだ」

▽伊藤は「議会の承認を経ないで

国政を執行すれば立憲政体ではなくなる」

最終的には「承認」は「協賛」に修正された

▽「臣民ノ権利義務」(第3章)「権利」も論争に

有栖川宮熾仁親王(ありすがわのみや・たるひとしんのう)

天保6(1835)～明治28(1895) 戊辰戦争で東征大総督。西南戦争では征討総督。明治18年左大臣から参謀本部長に

…… 英国留学、英語の効用 ……………

中江兆民に言わせると「レットルが読める程度」英公使パークスが天皇に謁見した時、サトウが身分上、御前に出られないため伊藤が通訳を務めたというから、ある程度は喋れたのでは…。

その能力は、文明開化への道をひた走る明治新政権では、大きな武器だし、何より世界の中の日本の弱い立場を知っていたことが、大きかったのでは。

中江 兆民(なかえ・ちやうみん)

弘化4(1847)～明治34(1901) 土佐藩出身。明治4年仏国留学。ルソーの「民約訳解」など自由主義思想の啓蒙に努める。喉頭ガンで余命1年有余と告げられて、「一年有半」「続一年有半」を執筆

パークス(Harry Smith Parkes)

1828～1885 イギリスの外交官。上海総領事を経て慶応1年日本公使。フランス公使ロッシュと対立し薩長を支援した

井上 毅(いのうえ・こし)

天保14(1843)～明治28(1895) 熊本藩出身。子爵。伊藤の下で憲法起草に当たり明治21年法制局長官。枢密院書記官長、文相歴任。皇室典範や教育勅語、軍人勅諭など、多くの勅令、法令起草に携わる

伊東 巳代治(いとう・みよじ)

安政4(1857)～昭和9(1934) 長崎出身。伯爵。伊藤の下で憲法起草に従事。明治21年枢密院書記官長。内閣書記官長、農商務相歴任。昭和に入り、枢密院最長老としてロンドン海軍軍縮条約反対など政府を激しく攻撃した

### 伊藤は反論した

憲法を作る精神は、第一に君主の権利を制限し、第二に臣民の権利を保護するにある。権利を明記しないで、責任だけを書くのなら、憲法を作る意味はなくなる。

▽伊藤も 天皇を 国家の基軸としていたが  
「人民にどんな義務があり、またどんな権利を持つのか。それを列記して初めて憲法になる」

### ●内閣制になっても薩長のバランスは欠かせなかった

▽首相は 初代から第7代まで 長州・薩摩が交互に  
大臣の数も 大体 同数ずつ割り振った

### 実は最初は「強い総理大臣」だった

内閣制度創設の際制定の「内閣職権」は、大宰相主義をとり、首相権限は極めて強かった。第1条で「総理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏宣シ、旨ヲ承ケテ大成ノ方向ヲ指示シ、行政各部ヲ統督ス」全文7か条のうち6か条までが各省大臣の統制に関するものだった。

▽「強い総理」は わずか 4年間の短命で 終わった  
▽きっかけは 黒田内閣総辞職(22年10月)  
大隈重信外相の 不平等条約改正案が  
世論の非難を浴び 閣内不一致を さらけ出した

### ●黒田は、後継に山県を推したが固辞して受けず、三条内大臣が大命で暫定首相に

▽明治天皇は 政情不安を心配され  
伊藤と黒田に「元勳」優遇の詔勅  
閣議にも 出席できるようにした  
これが「元老」の始まりだった

▽山県は 内閣制度改革を  
首相受諾の 第一条件とした

▽山県の意見を容れ  
首相権限を 大幅に 緩和した  
「内閣官制」制定の 22年12月24日  
山県は 第3代首相に就任した

### ●第1回総選挙は、23年7月1日行なわれた

### 大隈外相の改正案

治外法権を撤廃させる代わりに、大審院(駈の騎)に若干名の外国人判事を任命し、外国人が被告の場合は、判事の構成において外国人判事を多数とすること。この制度は条約実施後、12年間存続が約束されていた。

改正交渉は秘密で進められたが、22年4月19日付ロンドン・タイムズに内容が掲載され、「独立国家の体面に関わる」と世論が沸騰した。閣内でも反対論が高まったが、黒田首相が「強い総理権限」を使って強行突破しようとしたため、井上馨農商務相は郷里山口に帰ったまま上京しない。

伊藤枢密院議長も辞表を提出、内閣は統一を欠き、協力一致して難局に対処する姿勢が失われていった。

大隈は10月18日の閣議の後、外務省門前で来島恒喜に爆弾を投げられて右足を失う重傷を負った。条約改正交渉は延期となり、黒田内閣は総辞職に追い込まれた。

### 来島 恒喜(くるしま・つねき)

安政6(1859)～明治22(1889) 福岡県生まれ。国粹主義者。右翼団体「玄洋社」に入り、上京して大隈を襲撃。その場で短刀でノドを突いて自決した

### 詔勅(22年11月1日)

特二大臣ノ礼ヲ以テシ、茲二元勳優遇ノ意ヲ昭ニス

### 首相権限は、どう変わったのか

山県は、黒田のように内閣職権に定められた首相の統督的地位をとにかく乱用すると、天皇の大権を軽くする傾きがあり、また首相に統御能力が欠ける時は、内閣はかえって結集力を失ってしまう。むしろ天皇の権威

▽結果は 政府を 愕然とさせるものだった

▽民党(薩長の藩閥政治に批判的な 自由党 改進黨)が

300議席のうち 171議席 過半数を超えた

▽11月29日 第1回帝国議会召集

民党にとり 議会は 公認された政府攻撃の舞台

▽山県内閣は 8,332万円の予算案を提出

軍備増強の財源は 地租増徴 民党は

「民力休養」をスローガンに 容赦ない攻撃

▽631万円削減で やっと 予算を成立させた

…… 元老が「内閣製造者」に ……………

山県は24年4月9日辞意を表明したが、松方正義内閣が5月6日に成立するまで、1か月近くもかかった。山県が後継に推した伊藤が受けず、天皇は後継首相を誰にするか、元老たちに諮問された。これが慣例となって、元老は「キャビネット・メーカー」として、発言力を強めていくこととなる。

●政府案の否決が続けば、政府は議会に「超然」としてはいられなくなった

▽民党は 松方内閣予算案に 794万円削減を

主張して譲らず 松方首相は 議会を解散した

▽第2回総選挙(25年2月15日)は

「選挙大干渉」で 全国で 流血騒ぎ

政府は それでも 民党に勝てなかった

●伊藤も、政党との協力を真剣に考えるようになる

▽第3次内閣(31年1月)で

進歩党・大隈 自由党・板垣退助を

入閣させようとしたが うまく いかなかった

▽地租増徴案が 27対247

歴史的な大差で 否決され 伊藤の腹は固まった

元老会議(6月24日)で

自ら 新党を結成する考えを 明らかにした

政党嫌いの山県

「政党は逆賊なり」、反逆者だと書いた手紙が残っているし、伊藤が参内してくると、天皇に「尊氏(後醍醐天皇の引いた足利尊氏)が参りました」

を借りて内閣の団結と統一を保持する以外にない、と考えた。

改正の要点は、内閣職権で「行政各部ヲ統督ス」としていた首相の各省統制権を、「統一ヲ保持ス」と、大幅に弱めた。憲法55条では各大臣の「単独輔弼責任」を規定し、いわゆる閣僚平等主義を採り入れているから、内閣は国务大臣を以て組織する合議機関となり、首相は「同輩中の席次第1位」の地位しか持てなくなり、内閣議長に近い纏め役になった。

「国民代表」には程遠い衆議院

有権者は、直接国税15円以上を納めた25歳以上の男子。45万人余り、総人口4,500万人の1.14%に過ぎず、ほとんどが地主だった。島根1区は有権者たった52人だったという。

超然主義

伊藤の政党認識も、最初は甘いものだった。井上毅や金子憲太郎が「議会が開かれれば、政党の激しい攻撃が予想される。政府は、味方になる与党を持つ必要がある」と勧めても、伊藤は「ドイツのビスマルクを見よ。彼は与党を持たなくても、堂々とやっているではないか。誠心誠意を以て当たれば、どうして反対できるか」

「超然主義」、政府は政党の動きに左右されず、超然として政策を進める。これが、伊藤や歴代首相の議会に臨む考えだった。

…… 選挙大干渉 ……………

議会が解散されると、品川弥二郎内相は、地方長官に「議会解散は陛下のお叱りであるから、旧議員の再選は陛下の思召しに背く」こんな訓令を出して、民党候補の集会、選挙運動を

## 伊藤と山県の間で激論に

山県が「総理大臣の現職にある者が自ら政党を結成するのは、一層官民の抗争を激しくし、また何れの政党にも公平、公明正大であるべきことが出来なくなる」伊藤が総理辞職を表明すると、山県は「それでも元老として国務について天皇に仕えることが出来なくなる」

伊藤は「爵位・勲位の一切を返上する」

山県が「伊藤の新党結成は、遂に政党内閣の端緒を開くことになる。それでは天皇統治の国体に反し、民主政治に墮することになる」と非難すれば、伊藤は「憲政に関する根本観念を異にす」と一蹴した。「超然内閣論」から「政党内閣論」へ、伊藤の180度転換だった。

▽伊藤が「それなら、君がこの政局を引き受けるか」

山県も 沈黙するしか なかった

▽進歩・自由両党が合同(6月21日)

「憲政党」という 大勢力に なっていた

▽伊藤は この後 参内して 首相辞任を奏請

後継候補に 憲政党の大隈及び板垣

あるいは 山県か黒田の 何れかを推薦した

▽天皇が召集した 元老会議(25日)で

後継内閣を 引き受ける元老は 一人もなく

大命は 大隈・板垣に下り「隈板(かいはん)内閣」

▽伊藤は 33年9月

分裂した 憲政党主流派と 手を握り

念願の 立憲政友会を創設

▽政友会は 代議士155人

伊藤は 翌月 第4次内閣を組織した

●「元老政治」は第1次桂内閣(34年6月)が始まり

▽隈板内閣を除けば 元老でない者の 初の内閣

しかも 元老は 一人も 入閣していない

「二流内閣」とか「緞帳内閣」とか 言われた

▽日露戦争で「挙国一致内閣」

4年7か月 戦前では 最も長い 長期政権に

●軍政、軍事制度の主役は山県

▽西南戦争(船10年)まで 太政官が 軍隊の指揮権

妨害させた。

警察官が投票所まで付き添って、誰に投票するか、覗き込んで監視した。民党側も、壮士を動員して対抗し、死者25人、負傷者388人を出す騒ぎになったが、民党は163人が当選した。

品川 弥二郎(しながわ・やじろう)

天保14(1843)～明治33(1900)長州藩出身。子爵。松蔭に師事、戊辰戦争で奥羽、蝦夷を転戦。明治19年ドイツ公使。枢密顧問官を経て24年松方内閣内相となったが、選挙干渉を非難され翌年辞任

板垣 退助(いたがき・たいすけ)

天保8(1837)～大正8(1919)土佐藩出身。伯爵。戊辰戦争で総督府参謀を務め新政府参議。征韓論争に敗れ下野。明治7年愛国公党を組織、民撰議院設立建白書を提出して自由民権運動の先駆となる。14年自由党を結成し総理。15年刺客に襲われ負傷。29年第2次伊藤内閣で内相。31年改進黨と合流し憲政党を結成。第1次大隈内閣内相。33年政界を引退

## 日本初の政党内閣に

山県は友人への手紙に「本朝政海一大変動、遂に明治政府は落城して政党内閣と為りたる」と嘆いた。

時事新報は「民党が薩長三十年の天下を乗っ取ったのは、徳川三百年の天下を乗っ取ったに等しい」画期的な意義を強調したが、大隈内閣は、憲政党内の派閥抗争から、わずか4か月であっけなく崩壊した。

しかし、これで長く続いた薩長藩閥による政権交替というパターンは終わりを告げる。この後、山県・伊藤と、長州閥による2代の内閣が続くが、それはもう以前のような旧式の藩閥内閣ではなく、政党と手を握り、その主



▽「竹橋事件」に 大きな ショック

参謀本部を設置(明治11年12月) 軍自体が指揮権

▽憲法制定前に「統帥権独立」の既成事実

▽参謀本部は 建前としては

天皇の補佐機関であり 決定権 指揮権はない

だが 情報を集めて 判断 結論は 参謀本部

▽「帷幄上奏権」天皇は よほどのことでない限り

拒否されないから 参謀本部の思うままに

▽「軍人勅諭」(明治15年1月)

「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」

天皇の権威を 軍隊に 確立した

▽「世論に惑わず政治に拘らず」

軍人の政治関与を 戒めながら

陸軍は 統帥権を盾に 公然と政治介入

●軍をコントロールする所がなくなった

▽憲法草案では「陸海軍ノ編成ハ勅令ヲ以テ定ム」

審議で 異義が出て

「天皇ハ陸海軍ノ編成及常備兵額ヲ定ム」

▽編成(師・艦隊の編成) 常備兵額(定員)は 天皇の権限に

▽勅令で 決めることにしておけば

勅令審議の枢密院が 軍に 発言権を持ったが...

●明治の間、軍の統制はしっかりしていた

▽日清戦争で 首相の伊藤が 苦心したのは

内閣と軍部の協調 外交と軍事の調和だった

▽大本営が設置されると

伊藤は 天皇にお願いして

陸奥宗光外相と共に 御前会議に出席した

▽川上操六参謀次長は「直隸作戦」を計画

北京平野に 軍を進め 決戦を挑もうとしたが

伊藤は 列強の干渉を心配し

御前会議に意見書を提出 中止を求めた

伊藤の意見書(27年12月4日)

…列国ハ各其商民ヲ保護スルノ上ニ於テ、利害ノ関係最モ痛切ナルヨリ、勢ヒ合同干渉ノ策ヲ施サザルヲ得ザルノ勢ニ至ラシムルベキヤ必然タリ… 本大臣身文官ニ首班シ、敢テ軍議ニ容喙セントスルニ非ズト雖モ事苟モ大局ニ関ス。今一片ノ愚衷ヲ披瀝シテ当路万一ノ

張を容れていかざるを得なくなり、より新しい政治が展開される。

…… 文民統制だった太政官政府 ………

明治6年10月、西郷隆盛ら5参議が征韓論論争で辞任すると、政府は参議が各省長官を兼任することで体制を強化、政情不安を乗り切ろうとした。

参議の大久保が内務卿を兼任、工部卿の伊藤は参議になったが、陸軍卿の山県は陸軍中将、武官であるという理由で、政策決定機関である閣議構成員の参議にはなれなかった。

—— 竹橋事件 ——

明治11年8月23日夜、近衛砲兵第1大隊(千代田竹橋)で、兵隊260人余りが給料ダウンや西南戦争の恩賞を不満として騒ぎ出し、止めようとした大隊長ら2人が殺害された。53人を銃殺刑にしたが、軍人勅諭など軍律強化の契機となった。

—— 帷幄(いゝく)上奏権 ——

帷は垂れ幕、幄は引き幕のことで大將の陣営、つまり天皇を意味した。明治憲法下、参謀総長、軍令部総長が内閣を経ずに、軍機・軍令事項を天皇に直接上奏したことを言う。軍部の政治介入の大きな要因になった。

…… 大本営 ………

戦時の天皇直属の統帥機関。明治26年5月22日、「戦時大本営条令」が公布された。「大本営ニ在テ帷幄ノ機密ニ参画シ帝国陸海軍ノ大戦ヲ計画スルハ参謀総長ノ任トス」「幕僚ハ陸海軍将校ヲ以テ組織シ其人員ハ別ニ定ムル所ニ依ル」

本来は、参謀総長を幕僚長とした軍事の統括組織で、首相、外相は公式な御前会議出席者ではなかった。

参考ニ供セザルヲ得ザルナリ。

▽国家の 大事の前には

統帥権なんかに 構ってはいられなかった

▽大山巖第2軍司令官も

北京平野の 気象の厳しさを指摘

作戦延期を具申 作戦は 翌春に延ばされたが

伊藤の 優れた 国際認識だった

●「山県解任」に見せた中央統制

▽山県第1軍司令官は

参謀本部の 停止命令に従わず

軍を進めようとしたため 川上は 解任を決意

▽伊藤は 西郷従道海相(翻繙)から 相談を受け

「陛下にお願いして、勅命を出して頂こう」

▽山県の体面を考え 病気と軍状報告を 名目に

山県に帰国を命じた勅命

朕卿ヲ見ザル久シ。今又卿ガ病ニカカルヲ聞キ軫念ニ堪エズ。朕ハ更ニ敵軍全般ノ状況ヲ親シク卿ヨリ聞カント欲ス。卿宜シクスミヤカニ帰朝シテ、コレヲ奏セヨ

●山県の大きな権力は、元帥になり終身の陸軍大将

▽伊藤は 第3次内閣(31年1月)を組織した時

山県に 貴族院(山縣組織)の協力を求めたが

その見返りに 要求したのが 元帥府設置

▽内務大臣を 何回もやって

内務官僚に 強大な山県閥を 作っていた

▽手がけた組織の 防衛にも 抜かりなかった

▽「隈板内閣」の後に 第2次内閣を組織(31年12月)

「文官任用令」を改正し

「陸海軍大臣現役武官制」で

官僚・軍組織から 政黨員を締め出した

陸海軍大臣現役武官制

明治32年5月19日、陸海軍省の官制を改正し、定員表の備考に1行「大臣及次官ニ任ゼラレル者ハ現役将官ヲ以テス」と付け加えた。定員表は「陸海軍大臣ハ大将、中将ヲ以テ補任スル」と規定しているから、この1行で、それまでは

陸奥 宗光(むつ・むねみつ)

弘化1(1844)～明治30(1897) 紀州藩出身。伯爵。明治21年駐米公使。25年第2次伊藤内閣外相となりイギリスとの間に条約改正を実現。著に「蹇蹇(けんけん)録」

川上 操六(かわかみ・そうろく)

嘉永1(1848)～明治32(1899) 薩摩藩出身。陸軍大将。伯爵。明治22年参謀次長。陸軍の兵制をフランス式からドイツ式に改革した。31年参謀総長

元帥府条令(31年1月20日公布)

第1条 元帥府ニ列セラレル陸・海軍

大将ニハ、特ニ元帥ノ称号ヲ賜ウ

第2条 元帥府ハ、軍事上ニオイテ最高顧問トス

第3条 元帥府ハ勅ヲ奉ジ、検閲使トナリ、軍隊、艦隊ノ検閲ヲ行ナウコトアリ

第4条 元帥ニハ副官トシテ、佐尉官一人ヲ付属セシム

貴族院(31年3月)

憲法第33条により、衆議院と並んで帝国議会を構成し、皇族・華族のほか勅任議員(多額納税者・大学教授・官職出身)252名で組織された。衆議院と同等の立法上の権能を持っていた。

山県の人脈形成の秘密

慎重かつ神経質で、簡単には人を近付けなかったが、時間をかけて能力を見極めると、心にかけて面倒を見、必ず能力に応じたポストを与えた。これが一見冷たそうな山県の周りに人が集まった要因だった。

文官任用令改正(32年3月28日)

「隈板内閣」ができた時、ポスト争いは凄まじかった。次官、局長、知事と、

現役を退いた予備役、後備役でも大将、中将でさえあれば大臣になれたのが、現役でないとなれなくなった。

▽山県は 制度の改正には

「枢密院の審議が必要」と 歯止めをかけた  
枢密院は 山県系顧問官が多く 山県の牙城

▽「現役」の たった2文字が 陸軍の凶器に

内閣に圧力をかけ 退陣 成立に 強い影響力  
「軍部暴走」の 大きな要因になった

●元老政治に代わる適切な政治機構が作れなかった

元老政治の行き詰まりを心配した桂

桂太郎は明治45年7月、外遊の旅に出た時、同行の若槻礼次郎に話している。「今までは維新の元勳たちが達者で、陛下をお助けしてきたが、おいおい元勳も老齢になる。これから先は国民全体が陛下を助け、日本の政治をやって行くようにしなければならない。それには、どうしても政党を持つ必要がある」

▽桂は 英国の議会政治を 見てくる積もりだったが

「明治天皇危篤」で ロシアから引き返し  
桂自身も 1年余り後に 天皇の後を追う

●山県は、外交には慎重、むしろ抑え役だった

▽軍事力を頼んだ 中国威圧に反対

対中国政策では 米国の疑惑を招かぬよう  
「アメリカとよく話し合え」が 持論だった

原敬の言葉

「日米戦争は、山県さえ生きておれば、起こらないよ。山県は外国に対しては腰の弱い人だ。外国には非常に懸念深い人である。いくら陸軍の若手が騒いでも、山県存命中は大丈夫だ」

●伊藤は明治42年10月、ハルビンで暗殺された

▽伊藤は 何かする時 まず 世界の情勢を考え  
その中の日本が どうすることが賢明か  
穏やかさ 理性で 事を進めた

要職のほとんどを憲政黨員で占めてしまった。危機感を募らせた山県は、勅任官(階級1等、2等)の自由任用制度を廃止し、高等文官試験で奏任官(3階級9等)に任官した者を、昇任させる制度に改めた。これにより、政党勢力の勅任官進出への門戸は閉ざされた。

伊藤を助けた妻梅子

伊藤は女遊びの盛んな人だったが、常々「我輩の一生で一番有り難く思うのは、言うまでもなく天皇陛下であるが、その次はおかかだ」

梅子は伊藤が志士時代、下関で芸者をしていて、暗殺の恐れがあると、袖に刀を隠して人知れず伊藤の後ろをついて歩いたという。気取らず、勿体ぶらず、誰からも愛される人柄だった。

伊藤は韓国統監として赴任する時、何か予感がしたのか、養子博邦に手紙を書いている。「梅子にはいろいろ迷惑をかけた。私に万一のことがあったら、遺産のうち10万円を余生を送る費用として渡してくれ」

伊藤の死後、遺産を調べると10万円どころか、その半分もなかったという。

明治の芸者

相当の学問、見識があり気概のある女性が、少なくなかった。木戸孝允夫人となる幾松は若狭小浜藩士の家に生まれ、父親の死後、14歳で芸者になった。京都で、新撰組の厳しい探索の目を逃れ橋の下で乞食姿に身をやつした桂小五郎の元へ、夜陰に乗り握り飯を運んだ。木戸の死後は剃髪、明治19年43歳で亡くなった。

陸奥宗光夫人おりうも、新橋で評判の美人芸者だった。摂津竜野藩家老をしていた父親が江戸在勤中、踊りの師匠をしていた母親との間に生ま

## 伊藤暗殺に

井上馨「俺のような者が早く死んでも、伊藤をもっと長く世に残しておきたかった」

谷干城「戦争の如きは軍人でさえあれば出来る。しかし、一国の国政を裁断して大過なきを得る才能、才腕のある政治家は、滅多に得られるものではない」

ベルツ「伊藤公は日本の政治家の中で、ずば抜けた第一人者であった。強硬手段を好まず、内政外交とも穏健な方針を崩さなかったが、それが日本にとって正しかったことは、誰しも認める通りである。気取りがなく、快活で冷静な性格だった」

中村吉蔵「もし明治日本が、この平凡な偉人に引率されずに、覇気満々の自信家の手にあったら、ずいぶん危険な瀬戸際に引きずられていたことであろう」

れ、父親の病死後、新橋で芸者になった。陸奥が駐米公使時代、メキシコと対等条約を結び条約改正を成功に導くきっかけとなるが、その陰には、ワシントンの社交界で才色兼備のおりう夫人の存在が大きかったという。

## 谷 干城 (たに・たつき)

天保8(1837)～明治44(1911) 土佐藩出身。陸軍中将。子爵。西南戦争で熊本鎮台司令長官となり熊本籠城戦の指揮をとる。明治18年伊藤内閣農商務相。学習院長、貴族院議員を歴任

## ベルツ (Erwin von Balz)

1849～1913 ドイツ人医学者。明治9年来日し、東京医学校で内科・産婦人科を担当、日本の医学発達に貢献した。明治天皇の侍医・宮内省御用掛。38年帰国し滞日29年を「ベルツの日記」に遺す

## 中村 吉蔵 (なかむら・きちぞう)

明治10(1877)～昭和16(1941) 島根県生まれ。劇作家・演劇研究家。欧米で演劇を学び、母校早大の教壇にも立つ。著に歴史劇「井伊大老の死」「大塩平八郎」